

【資料 1-4-④】

全国の過去の風水害事例

発生年月日	気象名称	事例
昭和 9 (1934) 年 9 月 21 日	室戸台風	人的被害は、死者 2,702 人、不明 334 人、負傷者 14,994 人。家屋の全半壊および一部損壊 92,740 棟、床上・床下浸水 401,157 棟、船舶の沈没・流失・破損 27,594 隻という被害を出した。
昭和 20 (1945) 年 9 月 17 日	枕崎台風	<p>沖縄付近を北上した台風第 16 号は、9 月 17 日 14 時頃鹿児島県枕崎市付近に上陸した。枕崎（鹿児島県枕崎市）で観測された最低海面気圧 916.1hPa は、室戸台風の際に室戸岬（高知県室戸市）で観測された 911.6hPa（当時の記録として、もっとも低い海面気圧）に次ぐ低い値となった。台風は北東に進み、九州、四国、近畿、北陸、東北地方を通過して三陸沖へ進んだ。</p> <p>宮崎県細島（灯台：海上保安庁）で最大風速 51.3m/s（最大瞬間風速 75.5m/s）、枕崎で 40.0m/s（同 62.7m/s）、広島で 30.2m/s（同 45.3m/s）を観測するなど猛烈な風が吹いた。期間降水量も九州、中国地方では 200mm を超えたところがあった。</p> <p>終戦後間もないことで気象情報も少なかったことや防災体制も十分でなかったため各地で大きな被害が発生した。特に広島県では 2,000 名を超える死者・行方不明者が出た。</p>
昭和 22 (1947) 年 9 月 14 日	カスリーン台風	<p>紀伊半島の南海上を北上し、9 月 15 日に北緯 32 度を超えてから北東に進路を変え、同日夜房総半島南端をかすめて 16 日には三陸沖へ進んだ。</p> <p>台風は日本に接近したときは衰弱しており、強風による被害は少なかった。しかし、台風により日本付近に停滞していた前線の活動が活発化し、関東地方と東北地方では大雨となった。</p> <p>関東南部では利根川と荒川の堤防が決壊し、埼玉県東部から東京で多くの家屋が浸水した。群馬県、栃木県では土石流や河川の氾濫が多発し、両県で 1,100 名以上の死者・行方不明者が出た。東北地方では北上川が氾濫して岩手県一関市などで大きな被害が発生した。</p>
昭和 28 (1953) 年 7 月 16 日	南紀豪雨	<p>7 月 15 日、梅雨前線上を低気圧が発達しながら日本海に進み、低気圧の通過後、前線は 20 日まで関東から九州地方にかけて停滞した。</p> <p>前線の活動により、九州から東北地方にかけて日降水量が 200mm を超える大雨となった。特に紀伊半島では 17～18 日を中心に豪雨となり、期間降水量が 700mm を超えた所があった。この豪雨により有田川や日高川などが決壊し、和歌山県有田市、御坊市を始め多くの地域が濁流にのまれ、和歌山県内だけで 1,000 人を超える死者・行方不明者が出た。</p>
昭和 28 (1953) 年 8 月 11 日	南山城の大雨	<p>8 月 13 日に、サハリンからオホーツク海に進んだ低気圧から伸びる寒冷前線が、北海道の南東岸から東北地方北部を通って朝鮮半島中部に達して停滞した。14 日には南下して東北地方南部から北陸、近畿北部に停滞した。このため東北地方では大雨となり、山形県や秋田県を中心に被害が発生した。15 日には前線はさらに南下して関東地方南部、東海、山陰に達し 16 日まで停滞した。京都府南部、滋賀県南部、三重県、奈良県では 14 日夜から 15 日朝にかけて雷を伴う豪雨となった。特に京都府和東町湯船で 400mm 以上の大雨が降った。京都府では、木津川上流での土石流</p>

		や、井手町での大正池の堤防決壊により、300名を超える死者・行方不明者が出た。滋賀県でも多羅尾村（現：信楽町）で山崩れにより40名を超える死者が出るなど大きな被害があった。
昭和32(1957)年 7月25日	諫早豪雨	7月24日に梅雨前線は関東沖から九州南部、黄海南部に南下していた。25日朝に前線上の黄海南部に低気圧が発生して東に進み、前線が北上して活発化した。長崎、熊本、佐賀県では大雨となり、長崎県瑞穂町西郷（農林省の観測所）では24時間降水量が1,109mmの記録的な豪雨となった。長崎県諫早市では、市内を流れる本明川が2度にわたり氾濫、2回目の氾濫では上流で発生した大規模な土石流による大量の土砂と流木が市内を襲い、諫早市だけで500名を超える死者が出た。また熊本県でも死者・行方不明者が160名を越えた。 この雨は26日昼には小康状態となったが、27日夜から28日朝にかけては寒冷前線が九州地方を通過し、九州南部で大雨となり被害が出た。
昭和33(1958)年 9月26日	狩野川台風	9月21日にグアム島近海で発生した台風第22号は、26日21時過ぎに静岡県伊豆半島の南端をかすめ、27日00時頃神奈川県三浦半島、01時頃東京を通過、早朝に三陸沖に進んで海岸沿いを北上、夜に青森県の東海上付近で温帯低気圧に変わった。 この台風は、24日に中心気圧877hPaを観測するなど、大型で猛烈な台風となったため、関東南岸では26日午前から暴風となったが、北緯30度線を越えたあたりから急速に衰えたため、風による被害は少なかった。しかし南海上にあった前線が活発化しながら北上したため、東京で日降水量371.9mmを観測するなど、東海地方と関東地方では大雨となり、土砂災害や河川の氾濫が相次いだ。伊豆半島中部では、特に集中して雨が降り、大量の水が流れ込んだ狩野川が氾濫、伊豆地方だけで1,000名を超える死者が出た。また神奈川県や東京都でも、市街地の浸水や造成地のがけ崩れなどにより、大きな被害があった。
昭和34(1959)年 9月26日	伊勢湾台風	9月21日にマリアナ諸島の東海上で発生した台風第15号は、中心気圧が1日に91hPa下がるなど猛烈に発達し、非常に広い暴風域を伴った。最盛期を過ぎた後もあまり衰えることなく北上し、26日18時頃和歌山県潮岬の西に上陸した。上陸後6時間余りで本州を縦断、富山市の東から日本海に進み、北陸、東北地方の日本海沿いを北上し、東北地方北部を通過して太平洋側に出た。 勢力が強く暴風域も広がったため、広い範囲で強風が吹き、伊良湖（愛知県渥美町）で最大風速45.4m/s（最大瞬間風速55.3m/s）、名古屋で37.0m/s（同45.7m/s）を観測するなど、九州から北海道にかけてのほぼ全国で20m/sを超える最大風速と30m/sを超える最大瞬間風速を観測した。 紀伊半島沿岸一帯と伊勢湾沿岸では高潮、強風、河川の氾濫により甚大な被害を受け、特に愛知県では、名古屋市や弥富町、知多半島で激しい暴風雨の下、高潮により短時間のうちに大規模な浸水が起こり、死者・行方不明者が3,300名以上に達する大きな被害となった。また、三重県では桑名市などで同様に高潮の被害を受け、死者・行方不明者が1,200名以上となった。この他、台風が通過した奈良県や岐阜県でも、それぞれ100名前後の死者・行方不明者があった。
昭和42(1967)年 8月26日	羽越豪雨	日本付近に前線があり、この前線上を進む低気圧が27日と29日に東北地方を通過した。26日から27日にかけては新潟県の上

		<p>中越地方を中心に 50～100mm の雨が降った。28 日から 29 日朝にかけて前線が北上し、東北地方の日本海側や新潟県の北部で強い雨が断続的に降った。</p> <p>26 日から 29 日にかけての期間降水量は、新潟県の下越地方や山形県の南西部では 200mm を越え、多い所では新潟県黒川村の胎内川第一ダム（気象庁以外の観測所）で 748mm を観測した。この付近を流れる中小河川が氾濫し、大規模な土砂災害が多発した。被害は特に新潟県下越地方に集中し、新潟県の死者・行方不明者は 130 名を超えた。</p>
昭和 43 (1968) 年 8 月 17 日	寒冷前線による 大雨	<p>東シナ海を西に進んでいた台風第 7 号は、14 日夜進路を急に北東に変え、16 日には対馬海峡を通過、日本海を進み、17 日夕方沿海州で温帯低気圧となった。この低気圧から伸びる寒冷前線が通過する際に、各地で大雨となった。</p> <p>特に、岐阜県内では 1 時間に 100mm を超える大雨が降り、浸水や山がけ崩れが相次ぎ、白川町の飛騨川沿いの国道 41 号線では、大雨で停車中の観光バス 2 台が山崩れの土砂で飛騨川に転落し、乗員乗客 104 名が亡くなった。</p> <p>京都府でも大雨による浸水害や停電が多発した。また、台風第 7 号が接近した長崎県の対馬近海では、多数の漁船が遭難した。</p>
昭和 47 (1972) 年 7 月 3 日	豪雨	<p>7 月 3 日から 6 日にかけては、黄海から日本海北部に進んだ前線を伴った低気圧に向かって暖湿気流が流れ込んだため、九州と四国で雷を伴った局地的な大雨が降り、この期間の降水量が 500mm～800mm に達した所があった。このため、大規模な山がけ崩れが発生し、熊本県姫戸町で 122 名、高知県土佐山田町で 61 名の死者・行方不明者が出た。</p> <p>7 日から 9 日は、北日本にあった梅雨前線を低気圧が次々と通過し、北日本で大雨となった。青森県と秋田県では河川の氾濫による浸水害が多発した。</p> <p>9 日から 13 日にかけて梅雨前線が南下し、本州南岸から四国、九州北部付近に停滞した。また、日本の南海上には台風第 6 号、7 号及び 8 号があり、これらの影響で梅雨前線の活動は活発となり、西日本で 400～600mm、山間部の多い所では 1,000mm 前後の大雨が降った。この大雨により、中国地方では河川の氾濫による浸水害が多発し、愛知県や岐阜県、神奈川県では山がけ崩れや河川の氾濫により多数の死者が出た。</p>
昭和 56 (1980) 年 12 月から昭和 57 (1981) 年 3 月	昭和 56 年豪雪	<p>12 月中旬に日本海北部からオホーツク海に進んだ低気圧が発達して停滞し、強い冬型の気圧配置が続いた。このため、日本海側の地方で大雪となった。また、全国的に低温の日が続いた。</p> <p>24 日には本州の東海上で低気圧が発達して東北地方や北海道の太平洋側で大雪となり、山沿いでは降雪量が 100cm を超え、着雪や強風による送電線切断や鉄塔倒壊が相次いだ。漁船の遭難被害も多発した。その後 30 日にかけて強い冬型の気圧配置が続いて北陸地方を中心に大雪となり、高山（岐阜県高山市）や福井では積雪が 100cm を超え、山間部では 300cm を超えた。</p> <p>1 月は全国的に気温が低く、特に上旬半ばから中旬にかけて日本海側では大雪となった。最深積雪が敦賀（福井県敦賀市）で 196cm、山形で 113cm など、観測開始以来の記録を更新した。鉄道の運休などにより孤立する集落が多くでた。</p> <p>2 月上旬は引き続き日本海側では雪が降り、若松（福島県会津若松市）では 115cm の最深積雪を観測した。中旬は移動性高気圧に</p>

		覆われる日もあるなど寒さは緩んだが、月末には非常に強い寒気が入り、日本海側では日降雪量が 30～40cm を観測した。
昭和 58 (1983) 年 12 月から昭和 59 (1984) 年 3 月	昭和 59 年豪雪	<p>北海道では 10 月上旬に初雪を観測、11 月 27 日には青森で 48cm の積雪を観測した。</p> <p>12 月は中旬後半に強い冬型の気圧配置が続き、北陸以北の日本海側では大雪となり、青森では 2 日で 98cm の降雪（最深積雪 95cm）があった。下旬には山陰地方を中心に大雪となり、鳥取では日降雪量 114cm（最深積雪 95cm）を観測した。また、渡島半島でも大雪となった。</p> <p>1 月は寒気が入り、冬型の気圧配置となる日が多く、北海道の日本海側や北陸地方を中心に大雪となった日があった。25 日には高田（新潟県上越市）で日降雪量 95cm（最深積雪 239cm、28 日）を記録した。19 日、21 日、30～31 日には日本の南岸を低気圧が通過して九州から関東地方の太平洋側でも大雪となり、東京で 19 日に 22cm の積雪を観測するなど各地で 20cm 前後の雪が積もった。</p> <p>2 月も引き続き冬型の気圧配置となる日が多く、日本海側では 2～9 日、14～16 日、27～29 日を中心に平野部で日降雪量 50cm、山間部で 100cm 前後の大雪となった。高田（新潟県上越市）では 17 日に 292cm の最深積雪を記録した。17 日は南岸低気圧の影響で東海から関東地方にかけて大雪となり、東京や横浜で 20cm を超える積雪となった。25～26 日は関東から東北地方の太平洋側で大雪となった。</p> <p>3 月も全国的に曇りや雪の日が多く、東京の降雪日数は 10 日に及んだ。</p> <p>雪崩や雪下ろし中の事故による人的被害や、雪崩や融雪洪水による住家被害が相次いだ。太平洋側の地方でも転倒による負傷者が相次ぎ、農業被害も多かった。</p>
平成 12 (2000) 年 9 月 8 日～17 日	停滞前線、台風 第 14・15・17 号	<p>台風第 14 号は、9 月 2 日にマリアナ近海で発生し、西に進んで、12 日 19 時過ぎ沖縄本島を通過した。その後東シナ海を北東に進んで、16 日 15 時に朝鮮半島北東岸で温帯低気圧に変わった。一方、7 日頃から本州付近に前線が停滞しており、11 日から 12 日にかけて、台風第 14 号の東側を回る暖湿気流が前線に向かって流れ込んだため、前線の活動が活発となり、愛知、三重、岐阜県の東海地方を中心に記録的な大雨となった。名古屋では 11 日の日降水量が、平年の 9 月の月降水量の 2 倍となる 428mm となり、2 日間の合計降水量が 567mm に達した。また大雨は静岡県、山梨県にも及び、これらの広い地域で 2 日間の合計降水量が 200～400mm となったところがあった。期間降水量は、宮川（三重県宮川村）で 1,090mm となったほか、四国から東海地方で 800～1,000mm に達した。</p> <p>台風第 15 号は、7 日南大東島の南東海上で発生し、8 日に沖縄本島の南海上をとおり、その後南に向きを変えて、11 日ルソン島に上陸して熱帯低気圧になった。</p> <p>台風第 17 号は、15 日に硫黄島の南西海上で発生し、父島の西海上を通過したのち北に向きを変え、本州の東海上を北上して、18 日千島近海で温帯低気圧に変わった。</p>
平成 13 (2001) 年 9 月 2 日～7 日	前線、低気圧	<p>2 日から 4 日にかけて、前線が日本の南海上に停滞し、九州南部を中心に大雨となった。5 日に九州西海上で低気圧が発生し、発達しながら 6 日に山陰沖を通過し、7 日に日本海中部に進んだ。</p>

		<p>6日には、前線に向かって暖湿気流が流れ込み、四国地方から九州南部地方を中心に大雨となった。屋久島（鹿児島県上屋久町）で期間総降水量が673mm、清水（高知県土佐清水市）で616mmなどとなった。また7日には、寒冷前線の活動が活発となり近畿地方で大雨となった。</p>
平成16（2004）年 8月17日	台風第21号、秋雨前線	<p>9月21日03時にグアム島の西南西海上で発生した台風第21号は、発達しながら北西に進み、26日に強い勢力で沖縄本島と宮古島の間を通過した。27日に東シナ海でほとんど停滞した台風は、その後進路を北東に変えて進み、29日08時半頃、暴風域を伴って鹿児島県串木野市付近に上陸した。15時過ぎ、高知県宿毛市付近に再上陸した後、20時半頃、大阪市付近に再上陸し、北陸地方を通過して、30日09時に東北地方で温帯低気圧となった。29日07時50分までの1時間に尾鷲（三重県尾鷲市）で133mm、09時40分までの1時間に宮川（三重県宮川村）で139mmの猛烈な雨を観測するなどし、台風と前線の影響による期間降水量は、尾鷲で900mmを超えたほか、四国地方や近畿地方で400mm、東北北部で250mmを超えた所があった。</p> <p>この台風の影響により、三重県宮川村で大規模な土砂災害が発生した。また、愛媛県新居浜市と四国中央市を結ぶ高速道路、国道が多数の土砂崩れにより分断される被害が発生した。</p>
平成17（2005）年 12月から平成18 （2006）年3月	平成18年豪雪	<p>12月から1月上旬にかけて非常に強い寒気が日本付近に南下し、強い冬型の気圧配置が断続的に現れたため、日本海側では記録的な大雪となった。各地で積雪の12月としての最大記録を更新するとともに、東日本と西日本では12月の月平均気温が戦後最も低くなった。</p> <p>1月中旬以降も、日本海側の山沿いを中心に大雪となる日が続いた。このため、12月中旬から1月中旬を中心に、屋根の雪下ろし等除雪中の事故や落雪、また、倒壊した家屋の下敷きになるなど、甚大な人的被害が発生したほか、家屋の損壊や交通障害、電力障害等、多数の被害が発生した。</p> <p>12月からの度重なる大雪により、新潟県津南町では2月5日、これまでの最大記録を超える416cmの積雪を観測したほか、12月～3月の間、積雪を観測している339地点のうち23地点で、これまでの積雪の最大記録を更新した。また、12月としての最大記録を106地点で、1月としての最大記録を54地点で、2月としての最大記録を18地点で、3月としての最大記録を4地点で更新した。降雪量は、12月～1月上旬にかけて全般に平年を大きく上回った。1月中旬以降、山沿いではたびたび大雪に見舞われたのに対して、平野部では降雪量が平年並～少なかった。このため12月～3月の降雪量は山沿いでは多くの地点で平年を上回ったが、平野部では平年並となったところが多かった。</p> <p>なお、3月に入ると各地で融雪により積雪量は徐々に減少したが、山沿いでは平年より積雪の多い状態が続いた。</p>
平成23（2011）年 8月30日	台風第12号による大雨	<p>8月25日9時にマリアナ諸島の西の海上で発生した台風第12号は、発達しながらゆっくりとした速さで北上し、28日には強風半径が500kmを超えて大型の台風となり、30日には中心気圧が965hPa、最大風速が35m/sの大型で強い台風となった。</p> <p>台風は、その後もゆっくりとした速度で北上を続け、30日に小笠原諸島付近で進路を一旦西に変えた後、9月2日には暴風域を伴ったまま北上して四国地方に接近し、3日10時前に高知県東部に</p>

		<p>上陸した。その後、台風はゆっくりと北上して四国地方、中国地方を縦断し、4日未明に日本海に進み、5日15時に日本海中部で温帯低気圧となった。</p> <p>台風が大型で、さらに台風の動きが遅かったため、長時間にわたって台風周辺の非常に湿った空気が流れ込み、西日本から北日本にかけて、山沿いを中心に広い範囲で記録的な大雨となった。</p> <p>8月30日17時からの総降水量は、紀伊半島を中心に広い範囲で1,000mmを超え、奈良県上北山村上北山(カキヤマ)で総降水量は1,808.5mmとなるなど、総降水量が年間降水量平年値の6割に達したところもあり、紀伊半島の一部の地域では解析雨量で2,000mmを超えるなど、記録的な大雨となった。なお、奈良県上北山村上北山では最大72時間降水量が1,652.5mmと、1976年からの統計開始以来の国内の観測記録である1,322mm(宮崎県美郷町神門(ミカド))を上回ったのを始め、北海道から四国地方にかけての多くの地点で観測史上1位を更新した。</p> <p>このため、土砂災害、浸水、河川のはん濫等により、和歌山県、奈良県、三重県などで死者68名、行方不明者17名となり、北海道から四国にかけての広い範囲で床上・床下浸水などの住家被害、田畑の冠水などの農林水産業への被害、鉄道の運休などの交通障害が発生した。</p>
<p>平成24(2012)年 7月11日～14日</p>	<p>平成24年7月九州北部豪雨</p>	<p>7月11日から14日にかけて、福岡県、熊本県、大分県、佐賀県で大雨となった。</p> <p>11日朝に朝鮮半島付近で停滞していた梅雨前線が、12日朝には対馬海峡まで南下した。梅雨前線の南側にあたる九州北部地方では、東シナ海上から暖かく湿った空気が流入し、大気の状態が非常に不安定となった。発達した雨雲が線状に連なり次々と流れ込んだ熊本県熊本地方、阿蘇地方、大分県西部では、12日未明から朝にかけて猛烈な雨が継続した。阿蘇市阿蘇乙姫(アソオトヒメ)では、同日01時から07時までに459.5ミリ(7月の月降水量平年値2の80.6%、以下括弧書きの百分率は同じ意味。)を観測するなど、記録的な大雨となった。</p> <p>13日には初め対馬海峡にあった梅雨前線が午後には朝鮮半島付近まで北上し、14日にかけて停滞した。九州北部地方では、13日から14日も東シナ海上から暖かく湿った空気が流入し、大気の状態が非常に不安定となった。雨雲が次々と流れ込み発達したため、13日は佐賀県、福岡県を中心に、14日は福岡県、大分県を中心に大雨となった。福岡県八女市黒木(クロギ)では、14日11時30分までの24時間降水量が486.0ミリ(128.4%)となり、観測開始(1976年)以来1位の記録となった。</p> <p>この4日間の総降水量は、福岡県筑後地方、熊本県阿蘇地方、大分県西部で500ミリを超えた観測所が計5地点あり、筑後地方では7月の月平年値の150%以上となった観測所が2地点あった。</p> <p>この大雨により、河川のはん濫や土石流が発生し、福岡県、熊本県、大分県では、死者30名、行方不明者2名となったほか、佐賀県を含めた4県で、住家被害13,263棟(損壊769棟、浸水12,494棟)となった(消防庁調べ:7月27日12時00分現在)。その他、道路損壊、農業被害、停電被害、交通障害等も発生した。</p> <p>7月11日から14日にかけて九州北部地方に甚大な被害をもたらしたこの大雨について、気象庁は「平成24年7月九州北部豪雨」と命名した。</p>

<p>平成 25(2013)年 6 月 8 日～8 月 9 日</p>	<p>梅雨前線および 大気不安定によ る大雨</p>	<p>6 月 8 日から 8 月 9 日にかけて、日本海から東北地方付近にのびる梅雨前線と、本州に沿って西から流れ込む暖かく湿った空気や上空の寒気の影響で、広い範囲で大気の状態が不安定となり、九州から北海道にかけて局地的に非常に激しい雨が降った。この期間内の総降水量は、北海道登別市カルルスで 531.0 ミリと 500 ミリを超えたほか、福島県、新潟県、石川県、福井県、岐阜県、滋賀県、島根県、山口県で 300 ミリを超えた。</p> <p>24 時間降水量では、島根県鹿足郡津和野町津和野(ツワノ)で 29 日 2 時 50 分までに観測史上 1 位となる 381.0 ミリとなったほか、山形県、石川県、福井県、鳥取県、山口県でも観測史上 1 位を更新した地点があった。</p> <p>また、1 時間降水量では、山口県山口市山口 (ヤマグチ) で 28 日 8 時 13 分までに 143.0 ミリ、同県萩市須佐 (スサ) で 28 日 12 時 04 分までに 138.5 ミリ、島根県鹿足郡津和野町津和野(ツワノ)で 28 日 4 時 44 分までに 91.5 ミリの猛烈な雨が降り、観測史上 1 位を更新したほか、西日本から北日本の広い範囲で局地的に非常に激しい雨が降った。8 月 9 日、北日本では、日本海から湿った空気が流れ込み大気の状態が非常に不安定になり、秋田県・岩手県を中心に記録的な大雨となった。</p> <p>8 月 9 日 0 時から 10 日 24 時までに観測された最大 1 時間降水量が、秋田県鹿角市鹿角(カヅノ)では 108.5 ミリ、岩手県雫石町雫石(シズクイシ)では 78.0 ミリとなった。これらを含め、統計期間が 10 年以上の観測地点のうち、最大 1 時間降水量で計 10 地点、最大 3 時間降水量で計 12 地点、最大 24 時間降水量で計 5 地点が観測史上 1 位の値を更新した。また、解析雨量によると、秋田県大館市で 1 時間に 120 ミリ以上の猛烈な雨を解析し、秋田県大館市と北秋田市では 3 時間に約 300 ミリの雨を解析した。</p>
<p>平成 25(2013)年 8 月 23 日～25 日</p>	<p>8 月 23 日から 25 日にかけての大 雨</p>	<p>8 月 23 日から 25 日にかけて、西日本をゆっくり南下した前線に向かって、南海上から暖かく湿った空気が、太平洋高気圧の縁を回って流れ込んだため、大気の状態が非常に不安定となった。島根県西部では、24 日の明け方と 25 日の明け方に猛烈な雨が降り、24 時間降水量が多いところで 400 ミリを超え、8 月の月降水量平年値の約 3 倍の記録的な大雨となった。</p> <p>この大雨により、島根県邑智郡邑南町において死者 1 人、江津市と浜田市において住家の全壊 7 棟となった。また、河川の護岸と道路の路肩や法面の崩壊が多数発生し、住家の浸水と農地の冠水が発生したほか、土砂災害による住家の被害も多数発生した。その他、停電や断水、交通機関の運休など大きな影響が出た。(被害の状況は、島根県調べ(9 月 13 日現在))</p>
<p>平成 25(2013)年 9 月 15 日～16 日</p>	<p>台風第 18 号に よる大雨</p>	<p>9 月 13 日 3 時に小笠原諸島近海で発生した台風第 18 号は、発達しながら日本の南海上を北上し、14 日 9 時に強風域の半径が 500km を超えて大型の台風となり、15 日 18 時には暴風域を伴った。</p> <p>台風は、その後も北上を続け、潮岬の南海上を通過して、16 日 8 時前に暴風域を伴って愛知県豊橋市付近に上陸した。その後、台風は速度を速めながら東海地方、関東甲信及び東北地方を北東に進み、16 日 21 時に北海道の東で温帯低気圧となった。</p> <p>台風の接近・通過に伴い、日本海から北日本にのびる前線の影響や、台風周辺から流れ込む湿った空気の影響、台風に伴う雨雲の影響で、四国から北海道の広い範囲で大雨となった。また、台風</p>

		<p>や台風から変わった温帯低気圧の影響で、九州から北海道の各地で暴風となった。このほか、和歌山県、三重県、栃木県、埼玉県、群馬県及び宮城県においては竜巻等の突風が発生した。</p> <p>9月15日から16日までの総雨量は、三重県宮川で575.5ミリ、奈良県上北山で542.5ミリとなるなど、近畿、東海地方を中心に400ミリを超えたほか、統計期間が10年以上の観測地点のうち、最大1時間降水量で13地点、最大3時間降水量で25地点、最大24時間降水量で35地点、最大48時間降水量で25地点が統計開始以来の観測史上1位を更新した。風については、東京都三宅坪田で28.0m/s、愛知県セントレアで26.3m/s、兵庫県神戸で26.1m/sの最大風速を観測したほか、統計期間が10年以上の観測地点のうち5地点で最大風速の統計開始以来の観測史上1位を更新した。</p>
平成25(2013)年 10月15日～16日	台風第26号による暴風・大雨	<p>10月11日03時にマリアナ諸島付近で発生した台風第26号は、発達しながら日本の南海上を北上し、大型で強い勢力のまま、16日明け方に暴風域を伴って関東地方沿岸に接近した。その後、台風は関東の東海上を北上し、16日15時に三陸沖で温帯低気圧に変わった。この台風および台風から変わった温帯低気圧により、15日と16日を中心に、西日本から北日本の広い範囲で暴風、大雨となった。</p> <p>特に東京都大島町では、台風がもたらす湿った空気の影響で、16日未明から1時間100ミリを超える猛烈な雨が数時間降り続き、24時間の降水量が800ミリを超える大雨となった。10月14日から16日までの総降水量は、東京都大島町大島で824.0ミリ、静岡県伊豆市天城山で399.0ミリとなるなど、関東地方や東海地方では300ミリを超えたほか、統計期間が10年以上の観測地点のうち、最大1時間降水量で2地点、最大3時間降水量で9地点、最大24時間降水量で14地点が統計開始以来の観測史上1位を更新した。風については、宮城県女川町江ノ島で33.6m/s、千葉県銚子市銚子で33.5m/sの最大風速を観測するなど、各地で暴風を観測した。</p>
平成26(2014)年 7月6日～11日	台風第8号および梅雨前線による大雨と暴風	<p>7月4日9時にマリアナ諸島付近で発生した台風第8号は、発達しながら日本の南海上を北上し、6日に大型で非常に強い勢力となり、8日には大型で非常に強い勢力を保ったまま沖縄本島と宮古島の間を通過した。その後、次第に勢力を弱めながら東シナ海を北上した台風第8号は、九州の西海上で進路を東に変え、10日7時前、鹿児島県阿久根市付近に上陸した。台風第8号は九州を通過した後、本州南岸を東に進み、10日18時半頃に和歌山県南部に上陸し、11日2時半頃に伊豆半島南部を通過、11日5時前に千葉県富津市付近に上陸した後、11日9時に関東の東海上で温帯低気圧に変わった。</p> <p>この間、沖縄本島地方では記録的な大雨となったほか、台風周辺の湿った南風と梅雨前線の影響で、台風から離れた地域でも局地的に猛烈な雨の降ったところがあった。また、台風の接近に伴い沖縄・奄美や九州南部を中心に暴風となった。このほか、10日には高知県及び三重県において、竜巻とみられる突風が発生した。</p>
平成26(2014)年 7月30日～8月26日	台風第12号、第11号と前線による大雨と暴風 平成26年8月豪	<p>7月30日3時にフィリピンの東の海上で発生した台風第12号は、大型の台風となって沖縄の南海上を北上し、7月31日から8月1日にかけて沖縄・奄美に接近した。その後、台風第12号は暴風域を伴って北上し、8月4日3時に黄海で熱帯低気圧に変わ</p>

	雨	<p>った。また、7月29日12時にマリアナ諸島付近で発生した台風第11号は、強い勢力で日本の南海上を北上し、暴風域を伴って8月7日に大東島地方に接近した。台風第11号は強い勢力を維持したまま比較的ゆっくりとした速度で北上し、10日6時過ぎに高知県安芸市付近に上陸した後、次第に速度を速めながら四国地方、近畿地方を通過した。その後、台風第11号は暴風域を伴ったまま日本海を北上し、11日9時に日本海北部で温帯低気圧に変わった。</p> <p>この期間、台風第12号や台風第11号の周辺の風と高気圧縁辺の風の影響で、南からの暖かく湿った空気の流れ込みが継続したほか、8月5日から10日にかけて、前線が西日本の日本海側から北日本にかけて停滞した。</p> <p>これらの影響で、全国各地で大雨となった。台風第12号の接近に伴い、8月1日には沖縄・奄美で暴風となり、また、台風第11号の接近・上陸に伴い、8月7日から11日にかけて沖縄・奄美から東海地方にかけて暴風となった。</p> <p>平成26年7月30日から8月26日にかけて発生した大雨について、気象庁は「平成26年8月豪雨」と名称を定めた。8月15日から20日にかけて、前線が本州付近に停滞し、前線上を低気圧が東に進んだ。前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだ影響で、西日本と東日本の広い範囲で大気の状態が非常に不安定となった。</p> <p>このため、局地的に雷を伴って非常に激しい雨が降り、特に、16日から17日にかけては、近畿地方や北陸地方、東海地方を中心に大雨となり、局地的に猛烈な雨が降った所もあった。また、19日から20日にかけては、九州北部地方や中国地方を中心に大雨となり、局地的に猛烈な雨が降った所もあった。</p> <p>平成26年7月30日から8月26日にかけて発生した大雨について、気象庁は「平成26年8月豪雨」と名称を定めた。</p>
平成26(2014)年 10月13日～14日	台風第19号による大雨等	<p>10月3日21時にマーシャル諸島付近で発生した台風第19号は、発達しながらフィリピンの東海上を西に進み、8日3時から9日12時かけて勢力が最大(中心気圧900hPa)となった。</p> <p>台風は、フィリピンの東海上で進路を北に変えて沖縄の南海上を北上し、12日0時半頃に大型で非常に強い勢力で沖縄本島付近を通過した。13日には東シナ海で進路を北東に変え、13日8時半頃に鹿児島県枕崎市付近、13日14時半頃に高知県宿毛市付近、13日20時半頃に大阪府岸和田市付近にそれぞれ上陸した。</p> <p>速度を速めながら近畿地方、東海地方、関東地方、東北地方を進み、14日9時に三陸沖で温帯低気圧に変わった。この台風により、沖縄・奄美と西日本から北日本にかけての太平洋側を中心に大雨や暴風となり、海上は猛烈なしけとなった。</p>
平成27(2015)年 6月2日～7月26日	梅雨前線および台風第9号、第11号、第12号による大雨	<p>6月2日から7月26日にかけて、日本付近に停滞する梅雨前線の活動が断続的に活発となった。また、この間、7月9日から10日にかけて、台風第9号が沖縄地方に接近したほか、7月16日から17日にかけて台風第11号が、7月23日から26日にかけて台風第12号が日本に接近し上陸した。</p> <p>これらの台風や前線等の影響により、九州南部・奄美地方の多いところで総降水量が2,000ミリを超えるなど、各地で大雨となっ</p>

		<p>た。また、台風第9号や第12号の影響で、沖縄県や鹿児島県を中心に、台風第11号の影響で近畿地方を中心に暴風や強風となった。このほか、6月15日から16日にかけて関東地方北部を中心に、7月22日には山形県で竜巻等の突風が発生した。</p> <p>この大雨や暴風等により、土砂災害、浸水害、河川の氾濫等が発生し、甚大な被害となった。梅雨前線による6月の大雨では、九州を中心に土砂災害や浸水害が相次いだ。また、台風第11号の影響で、西日本や東日本で土砂災害や河川の氾濫が相次ぎ、兵庫県や埼玉県で死者計2名の人的被害や住家被害が生じたほか、ライフライン、公共施設、農地等への被害及び交通障害が発生した。さらに、台風第12号の影響で、鹿児島県を中心に浸水害等が発生した。</p>
平成27(2015)年 8月24日～26日	台風第15号による大雨等	<p>23日夜から24日明け方にかけて、非常に強い勢力で先島諸島に接近・通過した後、沖縄本島や奄美大島の西海上を北東に進み、25日未明には薩摩半島の西の海上に達した。その後、25日6時過ぎに熊本県荒尾市付近に上陸し、強い勢力を保ったまま九州北部を北上し、25日昼前に、日本海に達した。</p> <p>沖縄県の石垣島で23日21時16分に71.0メートルの最大瞬間風速を観測する等、南西諸島や九州を中心に猛烈な風が吹き、海上は猛烈なしけとなった。また、西日本から東日本にかけての広い範囲で、風が強く、うねりを伴い波が高くなった。</p> <p>台風や南から流れ込む暖かく湿った空気の影響で、南西諸島や西日本、東海地方で大雨となり、九州や山口県、三重県で局地的に1時間に80ミリを超える猛烈な雨が降った。</p>
平成27(2015)年 9月7日～11日	台風第18号等による大雨 ※平成27年9月 関東・東北豪雨 (9月9日～9月 11日)	<p>9月7日03時に発生した台風第18号は、日本の南海上を北上し、9月9日10時過ぎに愛知県知多半島に上陸した後、日本海に進み、同日21時に温帯低気圧に変わった。</p> <p>台風第18号及び台風から変わった低気圧に向かって南から湿った空気が流れ込んだ影響で、西日本から北日本にかけての広い範囲で大雨となり、特に関東地方と東北地方では記録的な大雨となった。</p> <p>平成27年9月9日から9月11日にかけて発生した大雨について、気象庁は「平成27年9月関東・東北豪雨」と名称を定めた。</p>
平成28(2016)年 6月19日～30日	梅雨前線による大雨	<p>6月19日から25日にかけて、本州付近に梅雨前線が停滞し、その前線を次々と低気圧が通過した。その後前線は南下し、一時活動が弱まったが、27日以降再び本州付近に北上し活動が活発となった。これらの影響で、西日本を中心に大雨となった。</p>
平成28(2016)年 8月16日～31日	台風第7号、第11号、第9号、第10号及び前線による大雨・暴風	<p>8月に相次いで発生した台風第7号、第11号、第9号は、それぞれ8月17日、21日、23日に北海道に上陸した。台風第10号は、8月30日に暴風域を伴ったまま岩手県に上陸し、東北地方を通過して日本海に抜けた。これらの台風等の影響で、東日本から北日本を中心に大雨や暴風となり、特に北海道と岩手県では、記録的な大雨となった。</p>
平成29(2017)年 6月30日～7月10日	梅雨前線(九州北部豪雨)及び台風第3号による大雨と暴風	<p>梅雨前線が、6月30日から7月4日にかけて北陸地方や東北地方に停滞し、その後ゆっくり南下して、7月5日から10日にかけては朝鮮半島付近から西日本に停滞した。</p> <p>また、7月2日09時に沖縄の南で発生した台風第3号は、東シナ</p>

		<p>海を北上し、7月4日08時頃に長崎市に上陸した後東に進み、5日09時に日本の東で温帯低気圧に変わった。</p> <p>梅雨前線や台風第3号の影響により、西日本から東日本を中心に局地的に猛烈な雨が降り、大雨となった。特に、7月5日から6日にかけては、対馬海峡付近に停滞した梅雨前線に向かって暖かく非常に湿った空気が流れ込んだ影響で、西日本で記録的な大雨となった。</p>
平成29(2017)年 9月15日～19日	台風第18号及び前線による大雨・暴風等	<p>9月9日にマリアナ諸島で発生した台風第18号は、日本の南を北西に進み、13日に非常に強い勢力で宮古島付近を北上した。台風は、15日には東シナ海で向きを東寄りに変え、17日11時半頃に鹿児島県南九州市付近に上陸した。その後、台風は暴風域を伴ったまま日本列島に沿って北上し、高知県や兵庫県、北海道に再上陸して、18日21時にサハリンで温帯低気圧となった。台風や活発な前線の影響で、南西諸島や西日本、北海道を中心に大雨や暴風となった。また、台風の影響で、南西諸島や西日本を中心に猛烈なしけとなり、大潮の時期と重なったため西日本を中心に高潮となった。</p> <p>これらの影響で、大分県をはじめ西日本を中心に河川の氾濫や浸水害、土砂災害等が発生した。また、各地で断水や電話の不通等ライフラインに被害が発生したほか、鉄道の運休や航空機・船舶の欠航等の交通障害が発生した(災害・被害に関する情報は、平成29年9月19日8時の内閣府とりまとめによる)。</p>
平成30(2018)年 5月20日～7月10日	前線(平成30年7月豪雨)及び台風第7号による大雨等	<p>6月28日以降、華中から日本海を通過して北日本に停滞していた前線は7月4日にかけて北海道付近に北上した後、7月5日には西日本まで南下してその後停滞した。また、6月29日に日本の南で発生した台風第7号は東シナ海を北上し、対馬海峡付近で進路を北東に変えた後、7月4日15時に日本海で温帯低気圧に変わった。前線や台風第7号の影響により、日本付近に暖かく非常に湿った空気が供給され続け、西日本を中心に全国的に広い範囲で記録的な大雨となった。</p> <p>6月28日から7月8日までの総降水量が四国地方で1,800ミリ、東海地方で1,200ミリを超えるところがあるなど、7月の月降水量平年値の2～4倍となる大雨となったところがあった。また、九州北部、四国、中国、近畿、東海、北海道地方の多くの観測地点で24、48、72時間降水量の値が観測史上第1位となるなど、広い範囲における長時間の記録的な大雨となった。この大雨について、岐阜県、京都府、兵庫県、岡山県、鳥取県、広島県、愛媛県、高知県、福岡県、佐賀県、長崎県の1府10県に特別警報を発表し、最大限の警戒を呼びかけた。</p> <p>風については、台風第7号の通過に伴い、沖縄から西日本で7月1日から5日にかけて最大風速20メートルを超える非常に強い風を観測した。また、沖縄・奄美から九州地方にかけて海は大しけとなった。</p> <p>これらの影響で、河川の氾濫、浸水害、土砂災害等が発生し、死者、行方不明者が多数となる甚大な災害となった。また、全国各地で断水や電話の不通等ライフラインに被害が発生したほか、鉄道の運休等の交通障害が発生した。</p>
平成30(2018)年 8月20日～9月5日	台風第21号による暴風・高潮等	<p>8月28日に南鳥島近海で発生した台風第21号は、日本の南を北西に進み、9月3日には向きを北寄りに変え、4日12時頃に非常に強い勢力で徳島県南部に上陸した。その後、4日14時頃には</p>

		<p>兵庫県神戸市に再び上陸し、速度を上げながら近畿地方を縦断し、日本海を北上、5日9時には間宮海峡で温帯低気圧に変わった。台風の接近・通過に伴って、西日本から北日本にかけて非常に強い風が吹き、非常に激しい雨が降った。特に四国や近畿地方では、猛烈な風が吹き、猛烈な雨が降ったほか、顕著な高潮となったところがあった。</p> <p>風については、高知県室戸市室戸岬では最大風速48.2メートル、最大瞬間風速55.3メートル、大阪府田尻町関空島（関西空港）では最大風速46.5メートル、最大瞬間風速58.1メートルとなるなど四国地方や近畿地方では猛烈な風を観測し、観測史上第1位となったところがあった。また、四国や近畿地方では海は猛烈なしけとなった。</p> <p>高潮については、最高潮位が大阪府大阪市では329センチメートル、兵庫県神戸市では233センチメートルなど、過去の最高潮位を超える値を観測したところがあった。</p> <p>雨については、9月3日から9月5日までの総降水量が四国地方や近畿地方、東海地方で300ミリを超えたところや9月の月降水量平年値を超えたところがあった。</p> <p>これら暴風や高潮の影響で、関西国際空港の滑走路の浸水をはじめとして、航空機や船舶の欠航、鉄道の運休等の交通障害、断水や停電、電話の不通等ライフラインへの被害が発生した。</p>
平成30(2018)年9月28日～10月1日	台風第24号による暴風・高潮等	<p>9月21日にマリアナ諸島近海で発生した台風第24号は、沖縄の南を北西に進み、9月28日から30日明け方にかけて、非常に強い勢力で沖縄地方に接近した後、北東に向きを変え、急速に加速しながら、30日20時頃に和歌山県田辺市付近に上陸した。その後、東日本から北日本を縦断し、10月1日12時までには日本の東で温帯低気圧に変わった。</p> <p>台風第24号の接近・通過に伴い、広い範囲で暴風、大雨、高波、高潮となり、特に南西諸島及び西日本・東日本の太平洋側を中心に、これまでの観測記録を更新する猛烈な風または非常に強い風を観測した所があったほか、紀伊半島などで過去の最高潮位を超える高潮を観測した所があった。</p> <p>風については、鹿児島県奄美市笠利では最大風速40.0メートル、最大瞬間風速52.5メートル、東京都八王子市八王子では最大風速26.3メートル、最大瞬間風速45.6メートルとなるなど南西諸島及び西日本・東日本の太平洋側を中心に猛烈な風または非常に強い風を観測し、観測史上第1位となったところがあった。また、南西諸島及び西日本・東日本の太平洋側では海は9メートルを超える猛烈なしけとなった。</p> <p>高潮については、和歌山県串本町では最高潮位254センチメートル、三重県尾鷲市では最高潮位145センチメートルなど、過去の最高潮位を超える値を観測したところがあった。</p> <p>雨については、9月28日から10月1日までの総降水量が九州地方及び四国地方や東海地方で400ミリを超えたところや9月の月降水量平年値を超えたところがあった。</p> <p>これら暴風及び高波、高潮、大雨の影響で、航空機や船舶の欠航、鉄道の運休等の交通障害、断水や停電、電話の不通等ライフライン等への被害が発生した。</p>

<p>令和元（2019）年 10月12日～13日</p>	<p>台風第19号による暴風・大雨等</p>	<p>10月6日3時に南鳥島近海で発生した台風第19号は、大型で猛烈な台風に発達した後、日本の南を北上した。</p> <p>台風は、大型で強い勢力を保ったまま、12日19時前に伊豆半島に上陸し、関東地方を通過した後、13日12時に日本の東海上で温帯低気圧に変わった。</p> <p>台風第19号の影響による記録的な大雨により、12日15時30分に静岡県、神奈川県、東京都、埼玉県、群馬県、山梨県、長野県、19時50分に茨城県、栃木県、新潟県、福島県、宮城県、13日0時40分に岩手県の合計1都12県に対して大雨特別警報が発表された。</p> <p>台風第19号は、13日に温帯低気圧に変わったが、その後も前線や低気圧の影響により、18日夜から19日夕方にかけて関東地方から東海地方にかけての太平洋側では局地的に雷を伴った非常に激しい雨が降った。</p> <p>気象庁は、台風第19号について、その名称を「令和元年東日本台風」と定めた。</p>
<p>令和2（2020）年 7月3日～31日</p>	<p>令和2年7月豪雨</p>	<p>7月3日から7月31日にかけて、日本付近に停滞した前線の影響で、暖かく湿った空気が継続して流れ込み、各地で大雨となり、人的被害や物的被害が発生した。気象庁は、顕著な災害をもたらしたこの一連の大雨について、災害の経験や教訓を後世に伝承することなどを目的として「令和2年7月豪雨」と名称を定めた。</p> <p>7月3日から8日にかけて、梅雨前線が華中から九州付近を通過して東日本にのびてほとんど停滞した。前線の活動が非常に活発で、西日本や東日本で大雨となり、特に九州では4日から7日は記録的な大雨となった。また、岐阜県周辺では6日から激しい雨が断続的に降り、7日から8日にかけて記録的な大雨となった。</p> <p>気象庁は、熊本県、鹿児島県、福岡県、佐賀県、長崎県、岐阜県、長野県の7県に大雨特別警報を発表し、最大級の警戒をよびかけた。</p> <p>7月3日から7月31日までの総降水量は、長野県や高知県の多い所で、2,000ミリを超えたところがあり、九州南部、九州北部地方、東海地方、及び東北地方の多くの地点で、24、48、72時間降水量が観測史上1位の値を超えた。また、旬ごとの値として、7月上旬に全国のアメダス地点で観測した降水量の総和及び1時間降水量50mm以上の発生回数が、共に1982年以降で最多となった。</p> <p>この大雨により、球磨川や筑後川、飛騨川、江の川、最上川といった大河川での氾濫が相次いだほか、土砂災害、低地の浸水等により、人的被害や物的被害が多く発生した。また、西日本から東日本の広い範囲で大気の状態が非常に不安定となり、埼玉県三郷市で竜巻が発生したほか、各地で突風による被害が発生した。</p>
<p>令和3（2021）年 7月1日～10日</p>	<p>梅雨前線による大雨</p>	<p>梅雨前線が、6月末から7月上旬にかけて西日本から東日本に停滞した。梅雨前線に向かって暖かく湿った空気が次々と流れ込み、大気の状態が不安定となったため、西日本から東北地方の広い範囲で大雨となった。</p> <p>7月3日にかけて、梅雨前線は本州南岸に停滞した。7月1日には伊豆諸島で線状降水帯が発生し、日降水量が300ミリを超える大雨となった。7月2日から3日にかけては、東海地方から関東地方南部を中心に断続的に雨が降り、静岡県の複数の地点で72時間降水量の観測史上1位の値を更新するなど記録的な大雨となった。この大雨により静岡県熱海市で土石流が発生したほか、</p>

		<p>河川の増水や低地の浸水が発生した。</p> <p>7月4日以降、梅雨前線は次第に北上し西日本から東日本の日本海側でも雨となった。特に7月7日は、中国地方の日本海側で線状降水帯が発生し、日降水量が300ミリを超える大雨となった。7月8日は、広島県を中心に日降水量が200ミリを超える大雨となった。7月9日夜から10日にかけては、九州南部を中心に雷を伴い猛烈な雨や非常に激しい雨が断続的に降り、9日からの総雨量が鹿児島県さつま町で500ミリを超える記録的な大雨となった。このため、気象庁は10日5時30分に鹿児島県、5時55分に宮崎県、6時10分に熊本県に大雨特別警報を発表した。青森県、三重県、島根県や鳥取県で1時間降水量の観測史上1位の値を更新するなど記録的な大雨となった。</p>
--	--	--